

第8節 まとめ

最後に今回の発掘調査で確認した主要な遺構・遺物について時期ごとに概観して、まとめに代えたい。

1 弥生時代(後期後半)

今回検出した2基の井戸はいずれも、幅0.35m前後、厚さ0.03m前後の縦板4枚を使用し、南北に長い長方形に組む構造である。縦板下方の両端には穿孔があり、SE01ではここに樹皮を通して4隅を緊縛している。SE03では、遺存していなかったため不明であるが、有機質の紐状のものを穿孔に通していたと推測される。四隅がびたりと組み合うように、SE01の縦板の両側面には内側に向かって傾斜面が付けられており、SE03の東西の縦板には両端に決りが施されている。福井県内では初めて確認された縦板組構造の井戸であり、若狭では木製井戸枠をもつ井戸も初検出である。

SE01の井戸枠は、樹皮で緊縛する際に細長い板材を内側に挟み込んだり、緊縛した際にできる穿孔と樹皮との隙間には木の小片を差し込んで仕上げるなど丁寧な作りである。また、北東の角を除いて井戸枠の傍らには、井戸枠とほぼ同じ高さの杭が打ち込まれている。これは井戸の4隅にかかる圧力を弱め、井戸を長期にわたって使用できるようにするために施されたと考えられ、高い技術力がうかがえる。

また、SE01は廃絶の際に、一旦中位まで埋めてから、縦杓子と小型壺などを置いて埋め戻していると考えられ、井戸鎮めなど埋井に関する儀礼が行われたことをうかがわせる。特に、水を汲むための縦杓子と水を貯めるための小型壺が完形で揃って出土していることは、水壺としての機能が想定されるものが井戸祭祀に用いられた可能性があるとする説⁽¹⁾とも一致する事象と考えられる。

当遺跡では集落の中央に自然流路が流れていたと考えられ、飲料水には窮しなかったと推測される。井戸の必要性が少ないことから、井戸が単に水を取得するための手段とみなされていたとは考え難い。井戸は特別な理由があって作られた可能性が高いと考えられ、作りが丁寧なことや廃棄の際に何らかの儀礼が行われたと想定されることも、その間接的な証拠と考えられる。

2 古墳時代(後期)

5区では6世紀末から7世紀初頭に比定される大型掘立柱建物SB01を確認した。隅と中央の柱間寸法の違いから身舎が桁行4間(11.00m)以上、梁行2間(6.00~6.40m)の四面庇付建物であると考えられ、現在確認されている県内の古墳時代の掘立柱建物のなかで最大の規模を誇る。また、身舎の柱穴は長軸1.50~2.18mと非常に大きく、中央付近に柱を設置したと推定される一抱え以上もある大きな石を置き、その周りを人頭大の石で囲んでおり、大掛かりな建築工事が行われたとみられる。身舎の柱は土層断面の観察から直径0.35m前後とみられ、庇部分の柱は遺存例から直径0.20m前後と考えられる。

SB01の区画溝の可能性があるので、東辺に平行してはしるSD18である。ここからは唯一器形のわかる竈形土製品(第66図5)が出土している。くの字状口縁をもち、庇を付加するもので、日本海側を中心にみられる器形である。基部は末広がりとなっており、底面に製作時の圧痕がみられる。京都府綾部市青野南遺跡など丹後の出土例と多くの共通点を有する。庇にはススが付着するが少量であり、長期にわたる使用とは考え難い。当遺跡では、併せて104点もの竈形土製品の破片を確認しており、県内で最多の出土数を誇る。特に5区の出土数は90点で群を抜いている。竈形土製品の用途については、屋外と屋内双方で使用する、移動可能な火処と捉える意見⁽²⁾もあるが、造り付け竈をもつ竪穴住居からも出土していることから、非日常の宗教的祭祀において聖なる食物を調理するための竈であったとする説が有力である⁽³⁾。このように考えるならば、ススの付着がほとんどみられないなど使用痕跡が希薄なことや、約10個体という多数の竈形土製品が必要とされたと推定されることも理解できる。

SB01は、四面庇付建物と考えられること、また祭祀に関連するとされる竈形土製品が周囲から多数出土していることなどから、一般の住居とは考えにくく、豪族または首長の居館であったと考えられる。その墓域としては、対面の丘陵上であって、あわせて100基以上という盛んな造墓活動がみられる多田古墳群・検見坂古墳群が挙げられるが、両古墳群とも大半が詳細不明であるため推論の域を出ない。

3 平安時代

中心となる時期は10世紀前半である。当該期に比定できる遺構は少ないが、遺物は質量ともに豊富で、文字資料(木簡・墨書土器)も確認している。なかでも注目されるのは「乃井村」⁽⁴⁾と書かれた灰釉陶器(第42図45)であり、この「乃井村」の「乃井」が、「濃飯駅家」の「濃飯」の同音異字である可能性が考えられる。

「濃飯駅家」とは『延喜式』や『和名類聚抄』にみえる若狭国遠敷郡の駅家である。平城宮跡出土木簡に「若狭国遠敷郡野駅家(大湯坐連×御口×)」「十月十五日」とみられる「野駅家」は「濃飯駅家」を指すと推定されている。また野駅家は野里郷に置かれ、野里郷は藤原宮木簡や平城宮木簡にみられる野里・野郷または野郷野里に相当するとされている。「濃飯駅家」の比定地については、伴信友著の『若狭旧事考』に代表される若狭町上野木・中野木・下野木付近とする野木説や、真柄甚松氏などがとる小浜市平野付近とする平野説があるが、ともに小字名から想定されたもので決め手を欠いている。

今回出土した付札木簡の1枚には「乃間田」との墨書がみられる。前述の「乃井村」と同じ「乃」が付き、関連をうかがわせる。「乃井」が「濃飯」そして「野里」に通じるとすれば、「乃井村」と「乃間田」は「野(里)郷」に存在した地名である可能性が考えられる。

墨書土器では、4区の上層包含層からまとめて出土した灰釉陶器3点(第49図104~106)も注目に値する。これらの墨書はよく似た筆跡であり、「若栗」2点と破損のため「栗」のみ判読できるものが1点ある。「若栗」を「わくり」と読めば、遺跡の所在地の「和久里」を指すと考えることができる⁽⁴⁾。「和久里」の文字を見出せる最も古い文書は、建久7年(1196)6月の『若狭国源平両家祇候輩交名案(京都東寺百合文書ホ)』であり、和久里を本貫としたと推定される「和久里四郎兵衛尉時継」という国衙在庁官人で御家人でもあった人の名字として記されている。地名としては、『若狭国守護職次第 群書4』に建武3(1336)年足利尊氏方の若狭国守護斯波時家が小浜入部のとき焼き払った在所の1つとして「和久利」がみえるのが初見である⁽⁵⁾。「若栗」と記された灰釉陶器は10世紀前半と考えられる資料であり、「若栗」が「和久里」の同音異字であるとすれば、「わくり」という名が『若狭国源平両家祇候輩交名案』に書かれる150年以上前から使われていたことになる。また「和久里」という地名は、国郡郷里制の里を想起させるものであり、さらに使用が遡る可能性も考えられる。そして、そうであるとすれば、国郡郷里制廃止後に「和久里」が「乃井村」のなかに包摂される形で存在していたと考えることもできるかもしれない。

灰釉陶器や木簡に書かれた文字が、仮に「野(里)郷」や「濃飯駅家」に関係するとしても、出土地を当のものとするのは短絡的である。しかし当遺跡では施釉陶器が多量に出土しており⁽⁶⁾、碗・皿だけでなく壺も確認しているほか、灯心油痕をもつ須恵器碗(第49図73)や漆を塗布した土師器碗(第44図16・第48図17)など一般の集落遺跡ではあまりみられないようなものも出土している。福井県内で施釉陶器が出土する遺跡の多くは北陸道沿いにあると指摘されており⁽⁷⁾、若狭で比較的まとまった量の施釉陶器が出土した若狭町玉置遺跡(第3図70)や大飯町吉見浜遺跡でも、碗・皿以外の器種は報告されていない⁽⁸⁾。このようなことから、こうした希少な遺物の存在は、これらを使用した限られた人々の存在を強く意識させるものである。また、もう一枚の付札木簡は「□□粉一石」と判読でき⁽⁹⁾、種子札と推定される。種粉の管理に使われたとみられることから、種粉や穀を管理した正倉などの施設が近くに存在した可能

性がうかがえる。このように出土遺物からは、北陸道沿いにある官衙的色彩を見て取ることができる。

仮に木崎遺跡が所在する南川下流域に「野(里)郷」があったとすれば、これまで空白であったこの地域の郷名を埋めることになる。加えて野(里)郷を若狭町野木に比定する場合に問題となる点、即ち遠敷郷・玉置郷・丹生郷が非常に近接している中で玉置郷の側に野(里)郷を置く余地(力)があるのかという点も解決できる。ただ当遺跡の周辺に「濃飯駅家」を比定すると、有力な国府推定地である松永・遠敷地区の西に駅家があることになり、都に近い方に駅家がある一般的な駅家のあり方とは異なる状況になる。このことは既に芝田寿朗氏や馬場基氏によって検討されており¹⁰⁾、両氏は丹後方面への道の存在とその道に沿って若狭国西部地域に文献にみえない駅家が置かれていた可能性や、日本海に通じる港を目指していた可能性を指摘されている。また、馬場氏は条里遺構の分布が木崎付近までであることに着目し、旧来は木崎遺跡周辺が古代港湾の立地としては最適な潟湖であったではないかとも言及されている。

当遺跡周辺に「濃飯駅家」を想定した場合、各駅家との関連を見ると、「濃飯駅家」と「近江国高島郡三尾駅家(滋賀県安曇川町)」の間の距離は約39kmと、「令義下」で規定された卅里(約16km)の2倍以上の距離がある。また、同様に「濃飯駅家」と「和名類聚抄」にみられるもう一つの若狭国の駅「弥美駅家(美浜町興道寺廃寺付近)」の間の距離も約31kmもある。しかし、「濃飯駅家」と「弥美駅家」の間には「葦田駅家(若狭町相田付近か)」が想定され、それを勘案すると「濃飯駅家」と「葦田駅家」の間が約19km、「葦田駅家」と「弥美駅家」の間が約12kmで、規定に近い数値が得られる。

以上、概観してきたが、今回の調査で出土した文字資料は、「濃飯駅家」や「野(里)郷」の所在地を匂わすものではあるものの、所在地論争を終結させるにはやや脆弱である。また、ともに公的施設の存在が指摘されている松永・遠敷地区の遺跡群や府中地区の遺跡群との関係など解明すべき問題が山積していることも事実である。しかし、「野(里)郷」や「濃飯駅家」に関係すると考えられる文字資料が若狭国遠敷郡内で初めて確認されたこと、そしてその出土地点がこれまで「濃飯駅家」に比定されてきた若狭町野木や小浜市平野付近とは全く異なる場所であったことは非常に意義深いものがある。この先、「濃飯駅家」や「野(里)郷」の所在地を比定する際には、看過できない資料となろう。

註

- 1 藤田三郎 1988 「弥生時代の井戸—奈良・大阪の井戸を中心に—」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ
- 川上洋一 1992 「北部九州の井戸—主に土器の出土状況について—」『みずほ』第6号 大和弥生文化の会
- 2 水口由紀子 1990 「南関東における竈形土器を持つ集落遺跡の性格」『物質文化』54 物質文化研究会
- 3 稲田孝司 1987 「忌みの竈と王権」『考古学研究』25巻1号 考古学研究会
- 4 有馬香織氏にご教授いただいた。
- 5 竹内理三編 1989 『角川日本地名大辞典』18 福井県
- 6 木崎遺跡では、灰釉陶器片約650片、緑釉陶器片約230片が出土している。
- 7 遠藤涼子 2003 「越前・若狭国における施釉陶器の一考察」『北陸の古代と土器』北陸古代土器研究第10号
- 8 玉置遺跡では、採集の際に施釉陶器をかなりの数量捨てたとされており、椀・皿以外の器種が存在した可能性は残る。
- 9 馬場基氏にご教授いただいた。
- 10 芝田寿朗 1998 「野里と古代丹後道—野里の所在とその周辺の古代寺院について—」『紀要』第7号 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 馬場基 2007 「古代の道と若狭の駅家」若狭歴史民俗資料館・郷土史講座資料

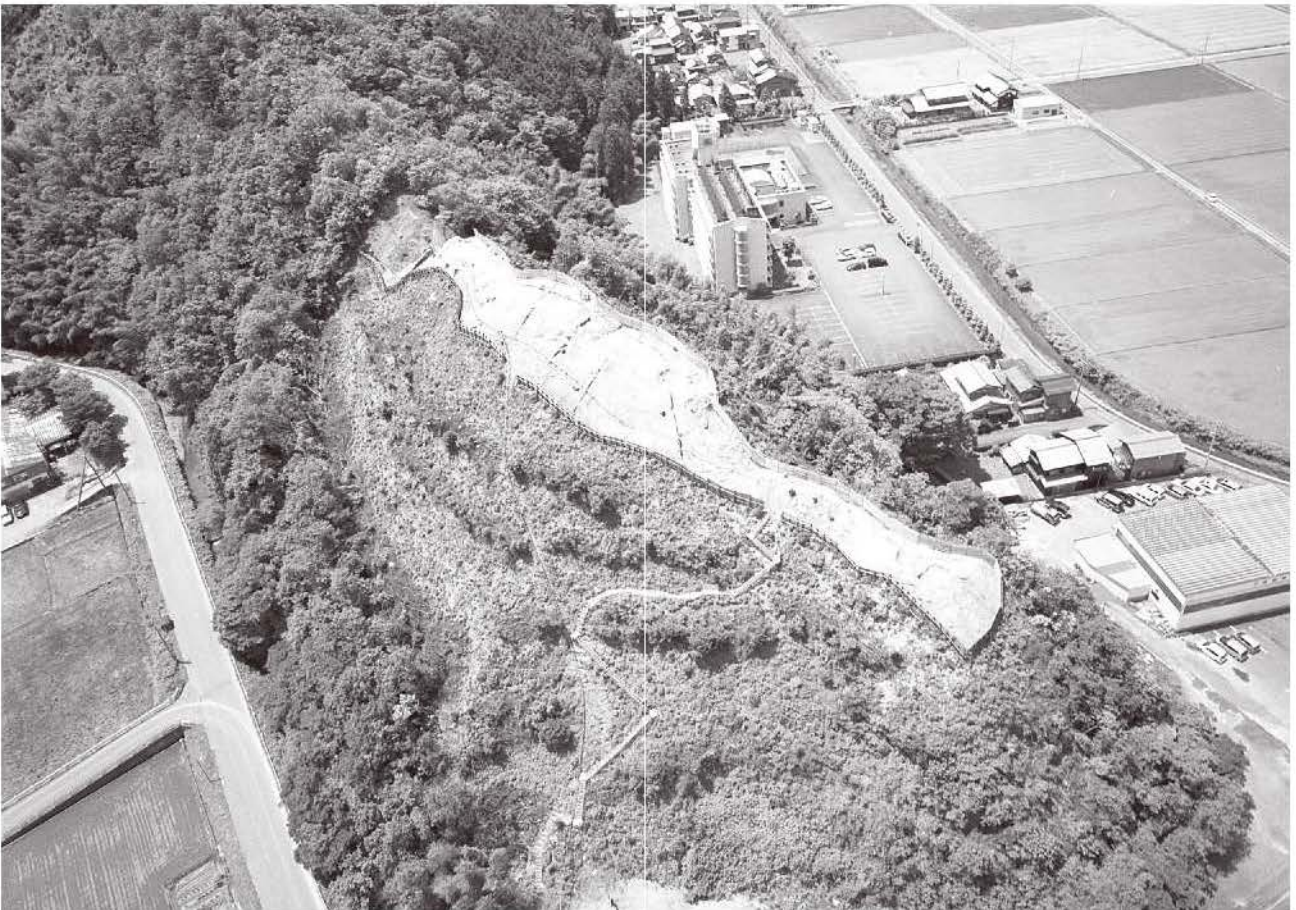
引用・参考文献

- 小野善裕 2008 「第三章 古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会
- 兼安保明 1990 「近江地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
- 加納俊介・石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 楠正勝 1996 「弥生中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市・金沢市教育委員会
- 久世康博 2001 「井戸はどうして埋められたのか(土器を入れる)」『研究紀要』第7号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 久保智康 1989 「越前における近世瓦生産の開始について～武生市小丸城跡出土瓦の検討～」『福井県立博物館紀要』第3号 福井県立博物館
- 古代の土器研究会 1996 『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4 煮沸具—』
- 古代の土器研究会 2003 『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』
- 齊藤孝正 1998 「猿投黒窯地区における緑釉陶器生産の展開」『植崎彰一先生古希記念論文集』植崎彰一先生古希記念論文集刊行会
- 社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会 1998 『古代北陸と出土文字資料』
- 杉山大晋 2009 「若狹国遠敷郡における官衙・集落遺跡—西縄手下遺跡の解釈をめぐって—」『条里制・古代都市研究』第24号 条里制・古代都市研究会
- 田嶋明人 1986 『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム古代土器研究の現状と課題 報告編』石川県考古学研究会ほか
- 館野和己 2006 「古代越前国と愛発関」『福井県文書館研究紀要』第3号 福井県文書館
- 田中昌樹 2003 「北陸地域の「竈形土製品」について」『富山考古学研究』第6号
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 出越茂和 2002 「第2節 弥生時代の井戸について」『大友西遺跡Ⅱ』金沢市埋蔵文化財センター
- 寺沢薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 2004 『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』
- 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 2004 『駅家と在地社会』
- 中村孝行 1983 『青野南遺跡第3・第4次発掘調査概報』綾部市教育委員会
- 橋本勝行 2002 「京都府北部地域の住まいと煮沸具」『第10回 京都府埋蔵文化財研究集会 発表資料集』京都府埋蔵文化財研究会
- 東日本埋蔵文化財研究会 1998 『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』
- 福井県 1993 『福井県史 通史編』1 原始・古代
- 北陸古代土器研究会 1995 『北陸古代土器研究』第5号
- 北陸古代土器研究会 1997 『北陸古代土器研究』第6号
- 北陸古代土器研究会 1997 『北陸古代土器研究』第7号
- 北陸古代土器研究会 1999 『須恵器貯蔵具を考えるⅠ つばとかめ』北陸古代土器研究第8号
- 北陸中世考古学研究会編 1997 『中・近世の北陸』桂書房
- 埋蔵文化財研究会 1992 『古墳時代の竈を考える』
- 埋蔵文化財研究会 2008 『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』
- 三田淳司編 2008 『寄名山遺跡』吉良町教育委員会
- 田辺昭三編 1996 「陶邑古窯跡群Ⅰ」『平安学園考古学クラブ記念論集』第10号 真陽社

写 真 图 版



(1) 調査区遠景(東より)



(2) 調査区全景(北東より)

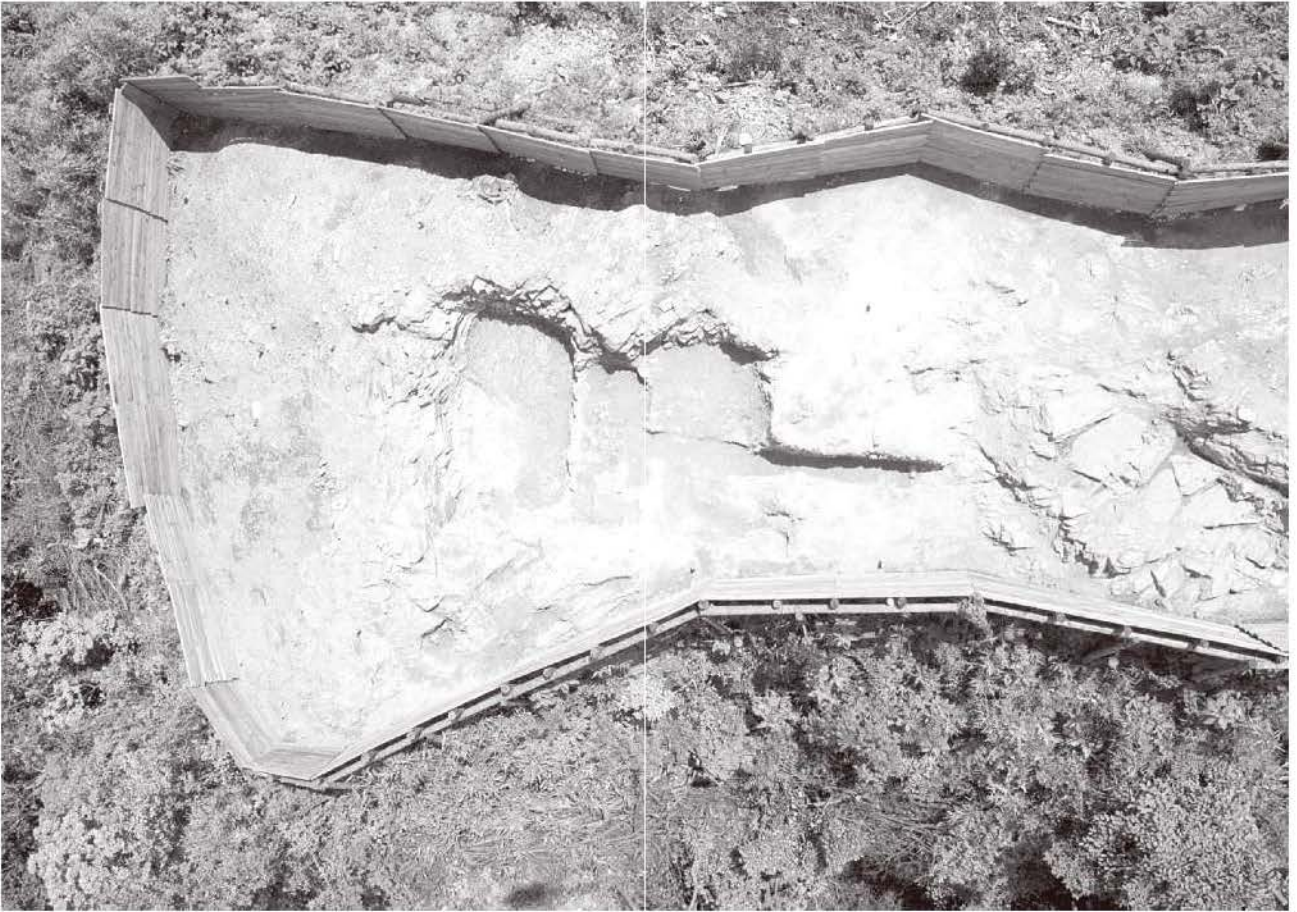
図版第二 木崎山城跡 台状墓1



(1)台状墓1・曲輪2(西より)



(2)台状墓1 埋葬施設1・2(東より)



(1) 台状墓2 (西より)



(2) 台状墓2 (南より)

図版第四 木崎山城跡 経塚1



(1) 経塚1 集石 (東より)



(2) 経塚1 石組 (東より)



(1) 経塚2 (西より)

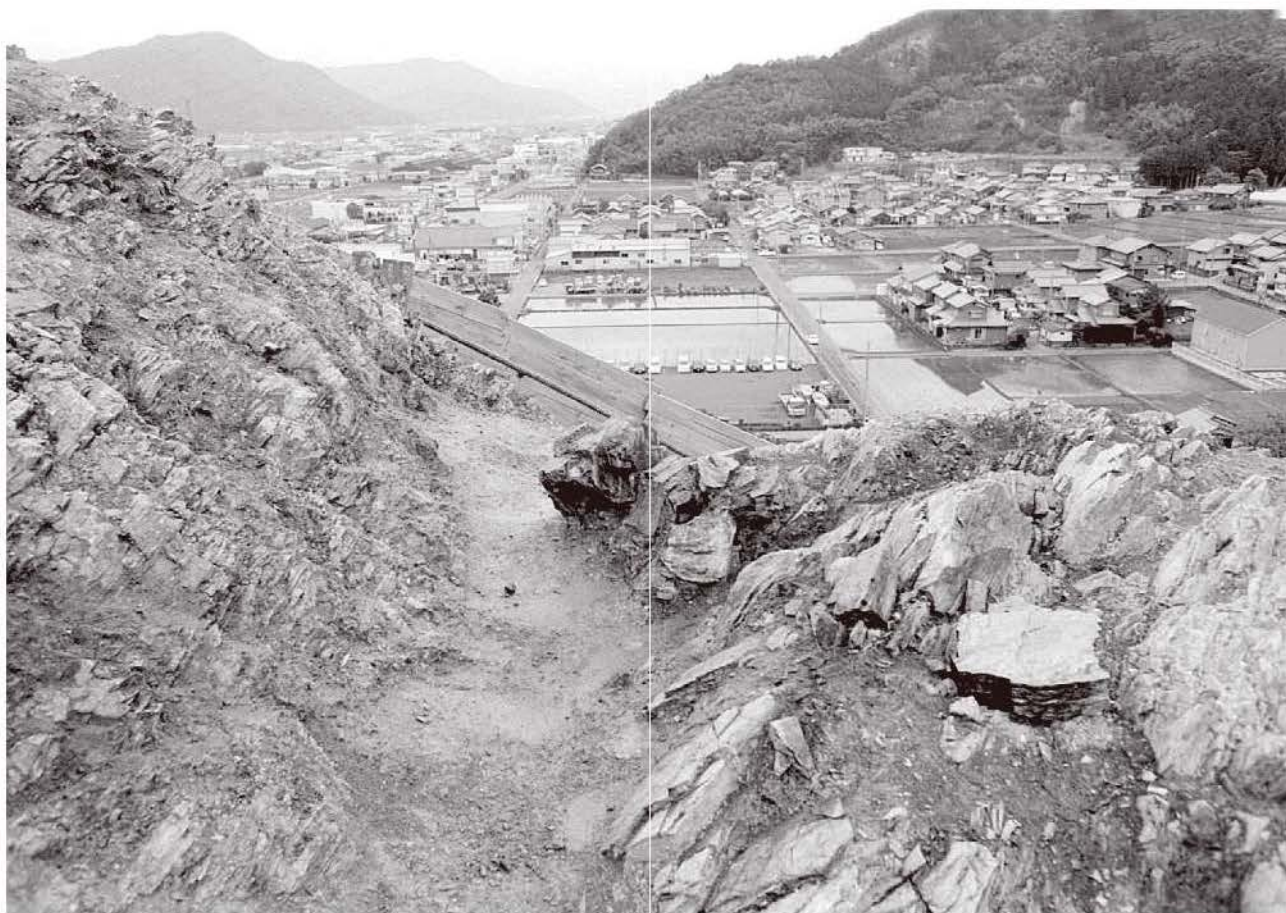


(2) 経塚2 (西より)

図版第六 木崎山城跡 曲輪・堀切



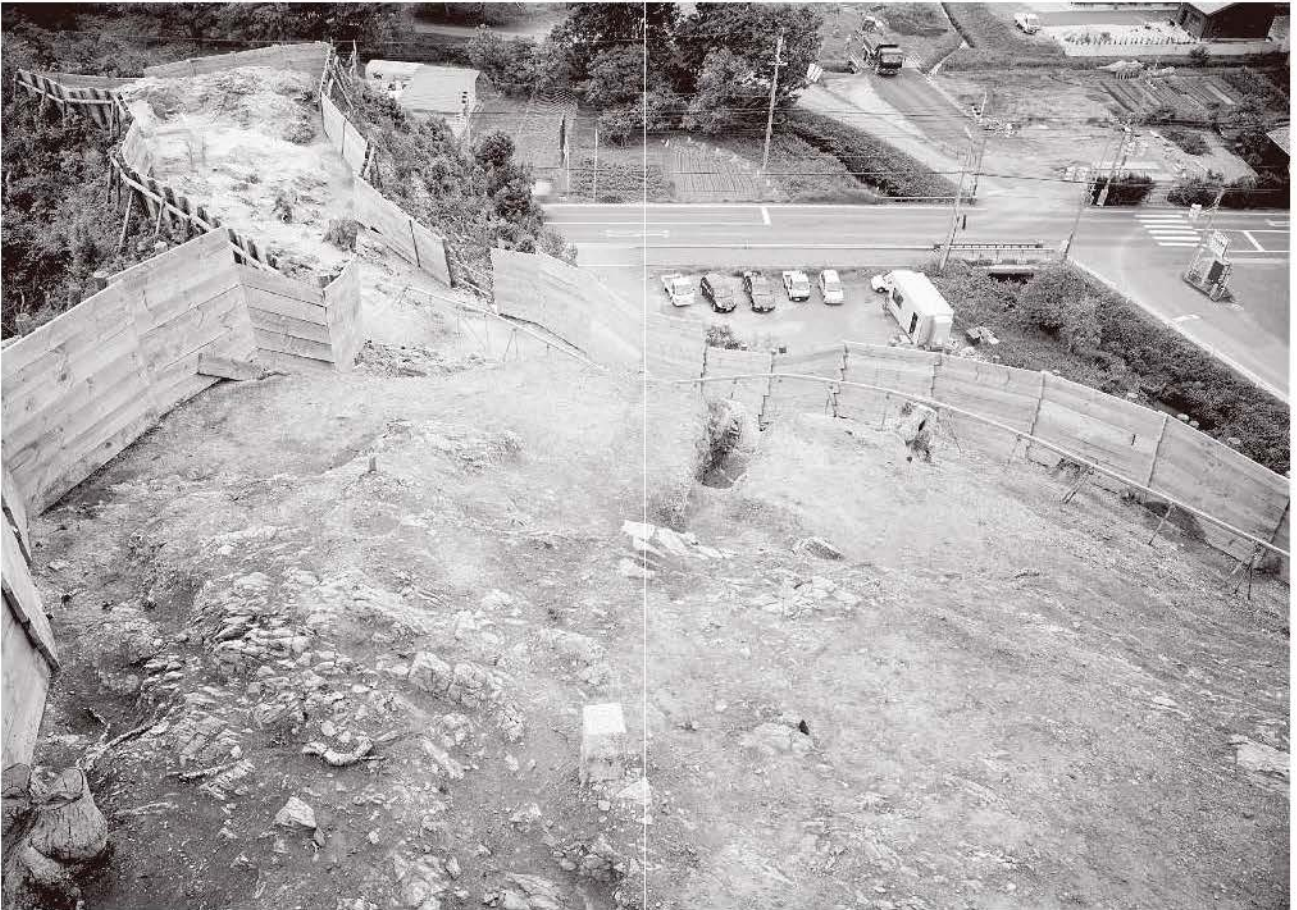
(1)堀切1・曲輪2(南より)



(2)堀切2(西より)

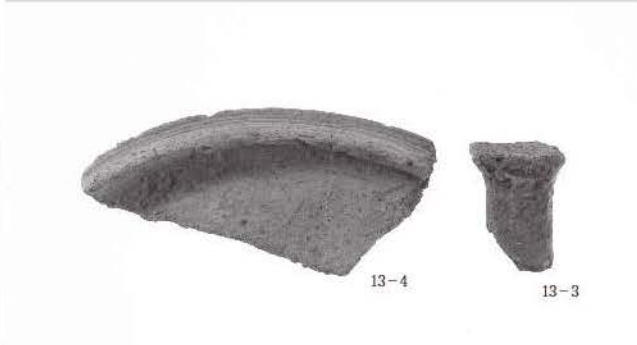
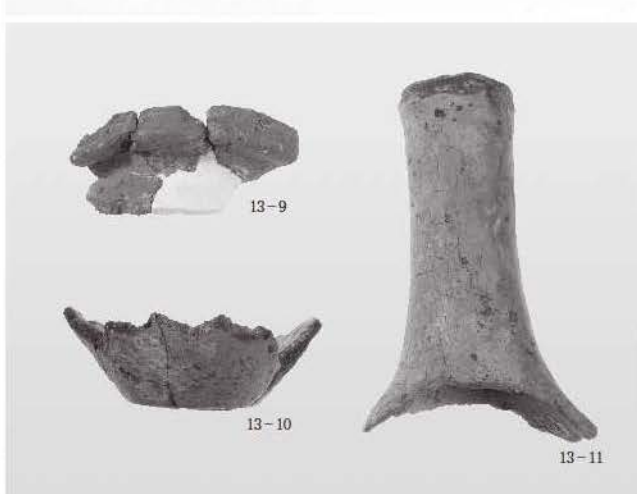
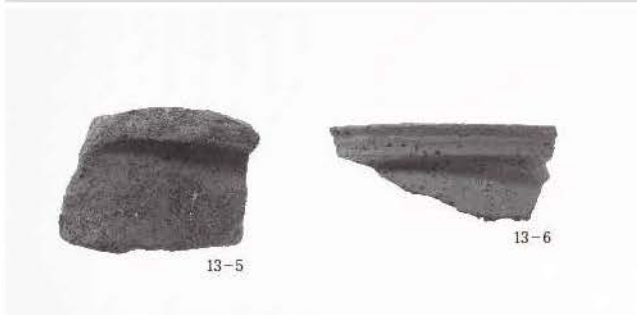
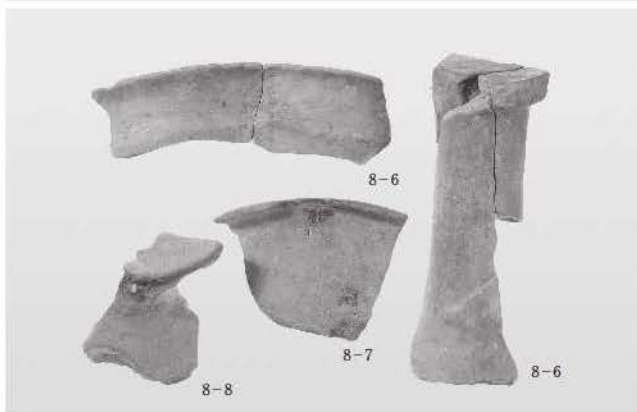
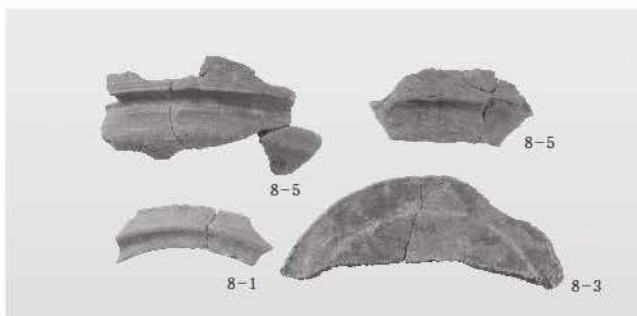


(1) 曲輪4・切岸(北より)

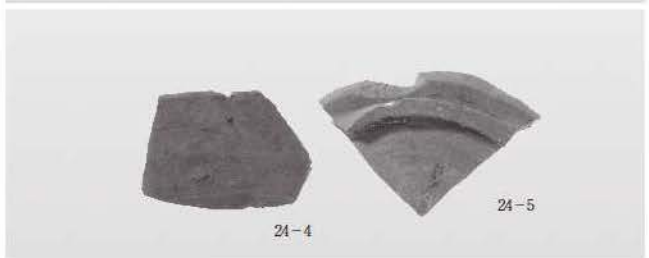
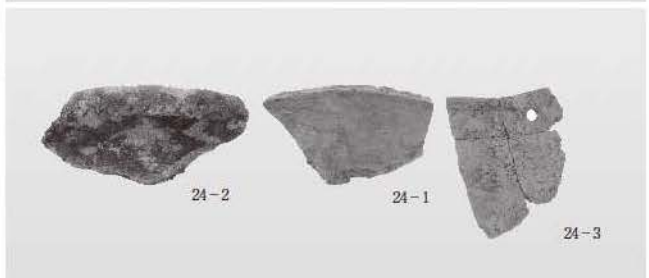


(2) 曲輪5(南より)

図版第八 木崎山城跡 遺物



台状墓1・2出土土器



経塚1・2、堀切1、遺構外出土土器・陶磁器

図版第一〇 木崎山城跡 遺物



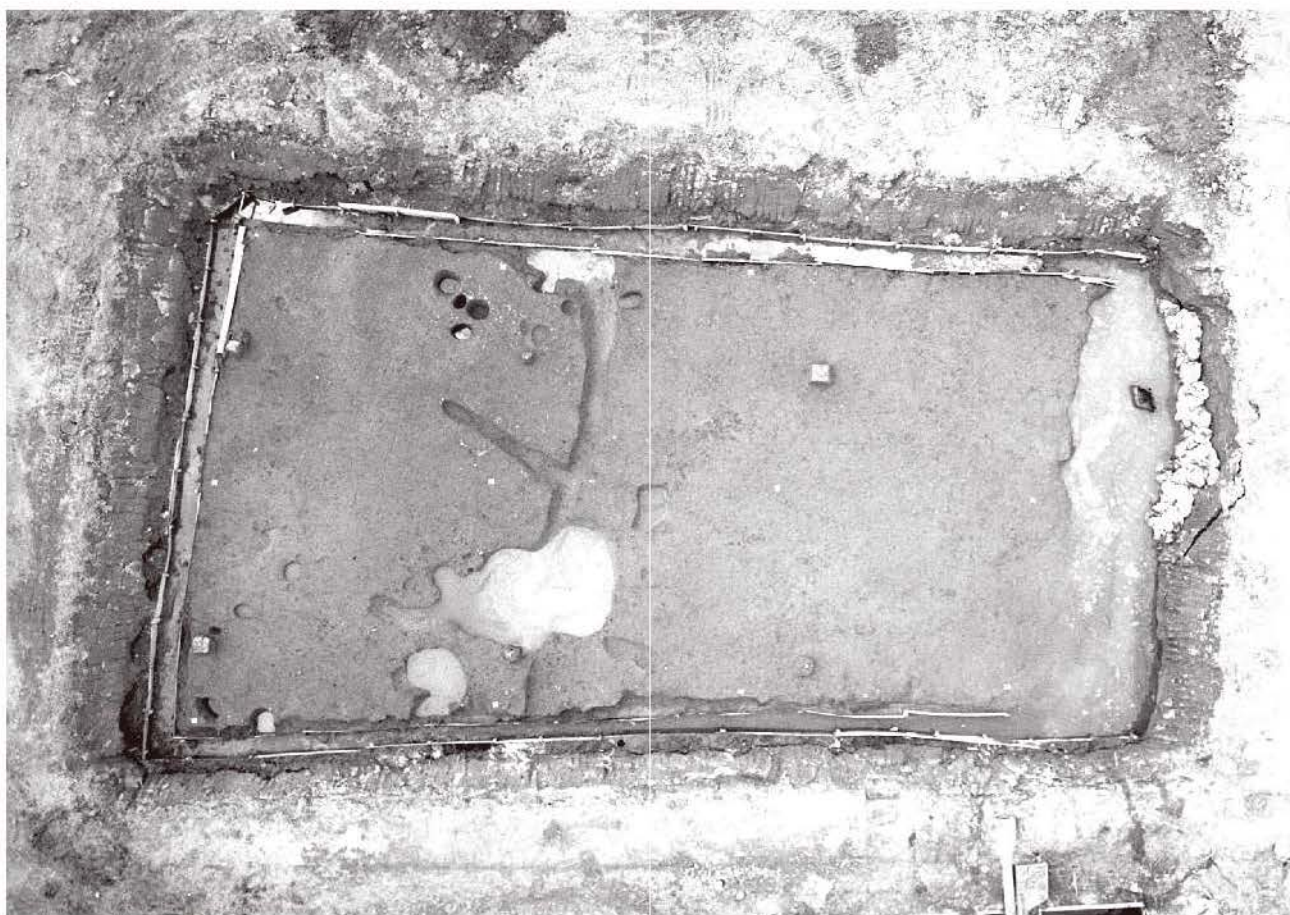
台状墓1・2、経塚2出土金属製品



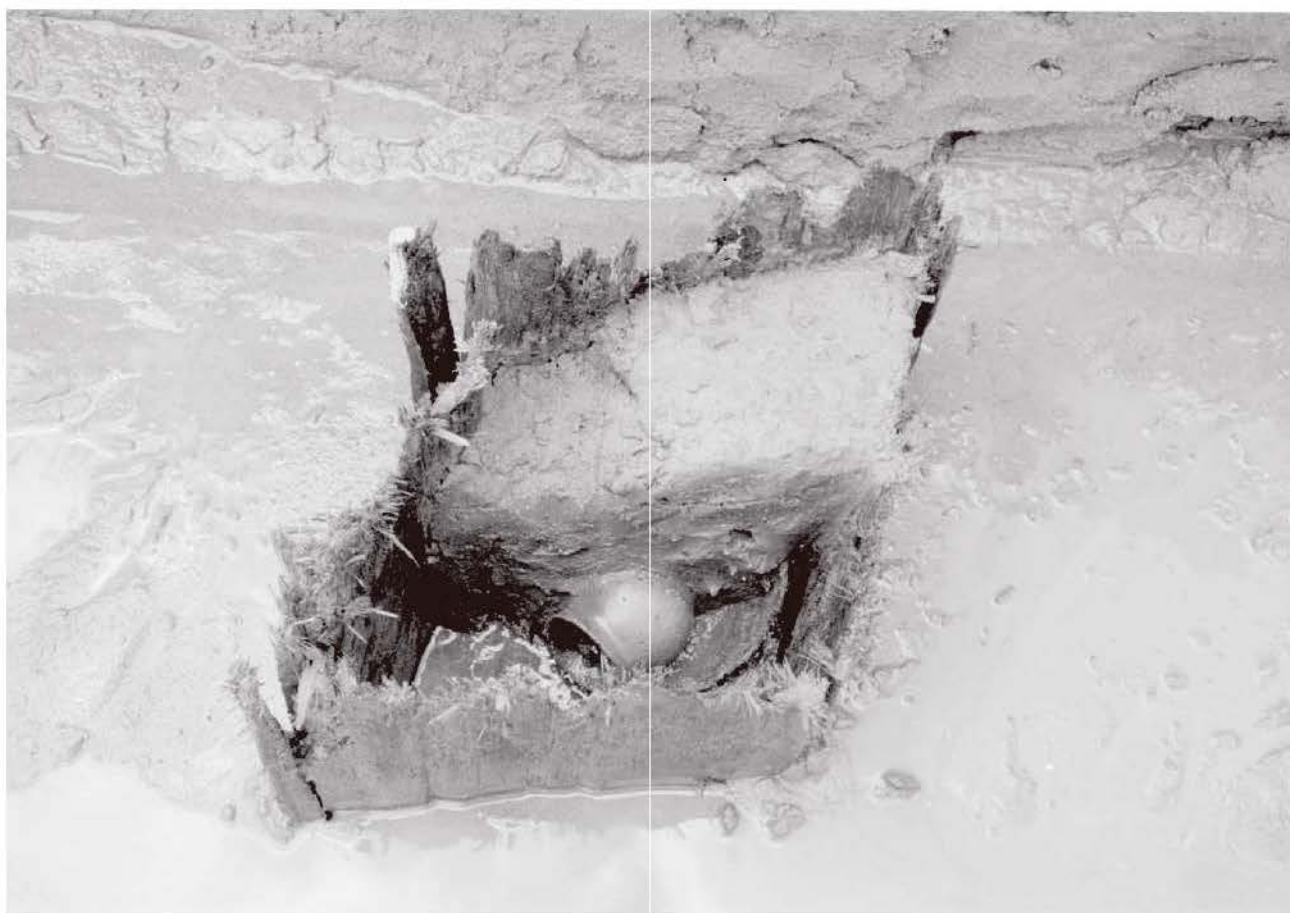
(1) 調査区全景・木崎山城跡遠景(北より)



(2) 1区全景(北より)



(1) 2区全景(北より)



(2) 2区SE01半截状況(東より)



(1) 3区全景(北より)



(2) 4区第1面全景(東より)



(1) 4区第2面全景(北より)



(2) 4区第2面立会調査地点全景(東より)



(3) 4区SE03井戸枠内完掘状況(南より)



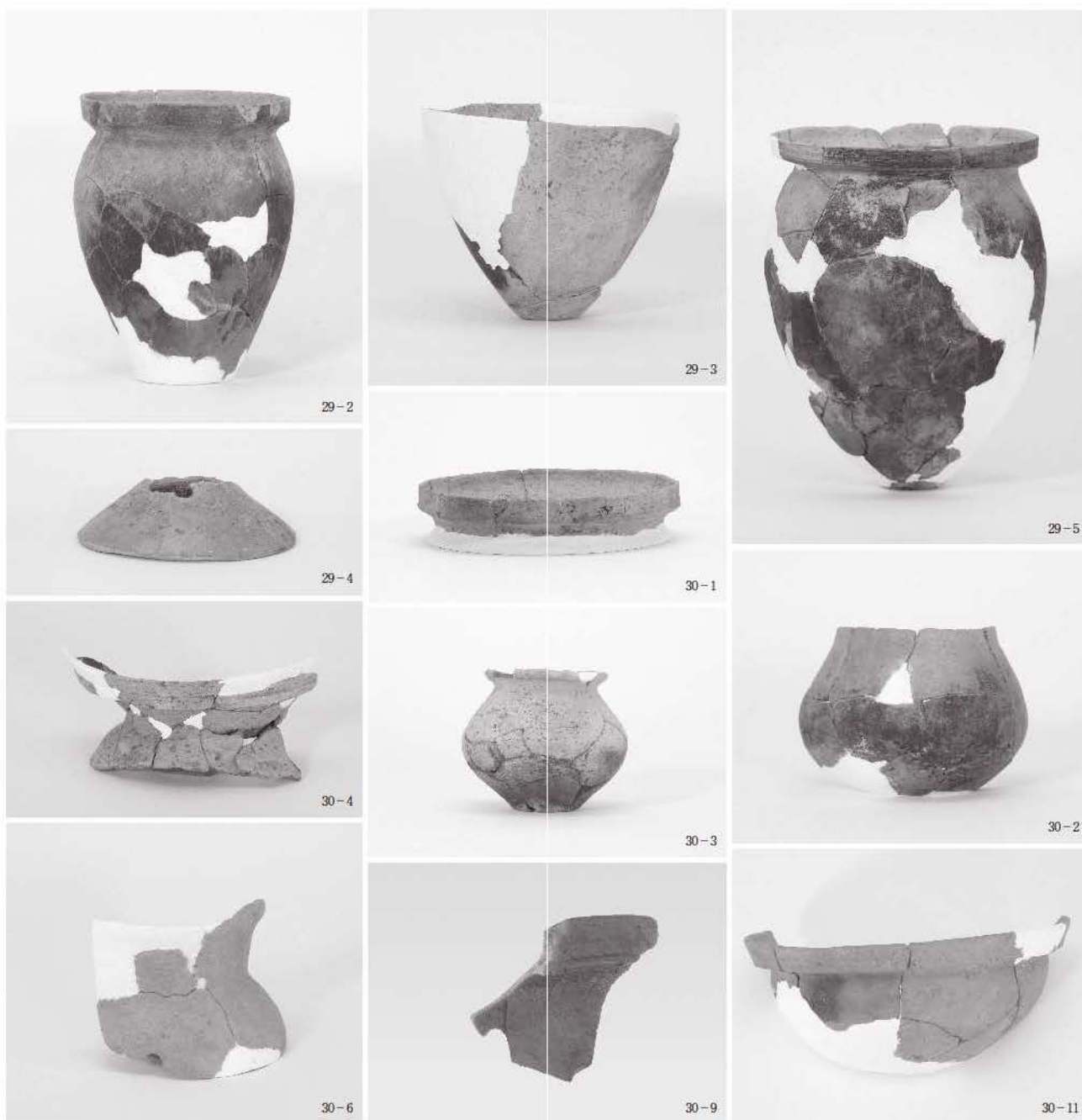
(4) 4区SE03半截状況(西より)



(1) 5区全景(北より)



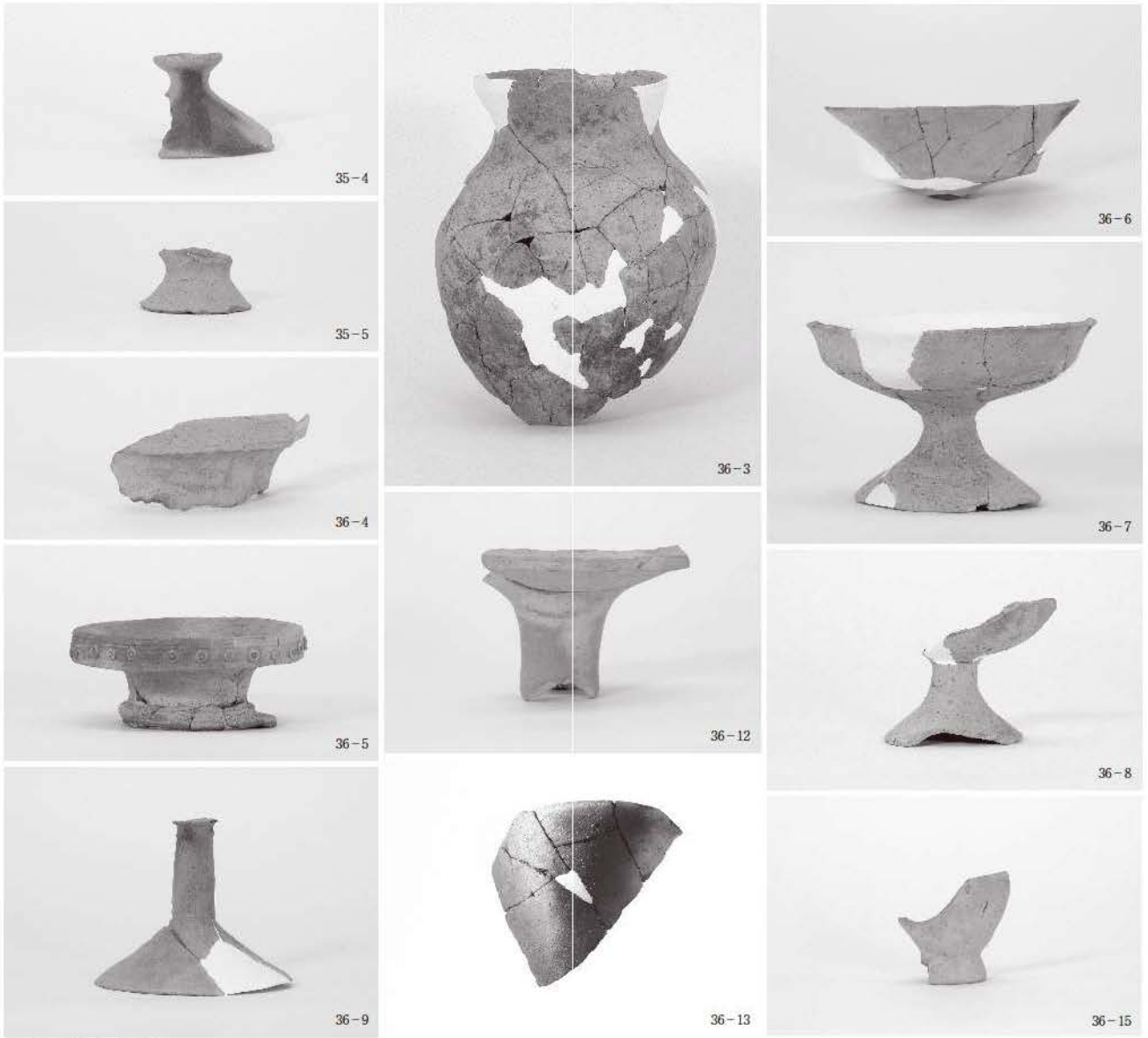
(2) 5区SE02(南西より)



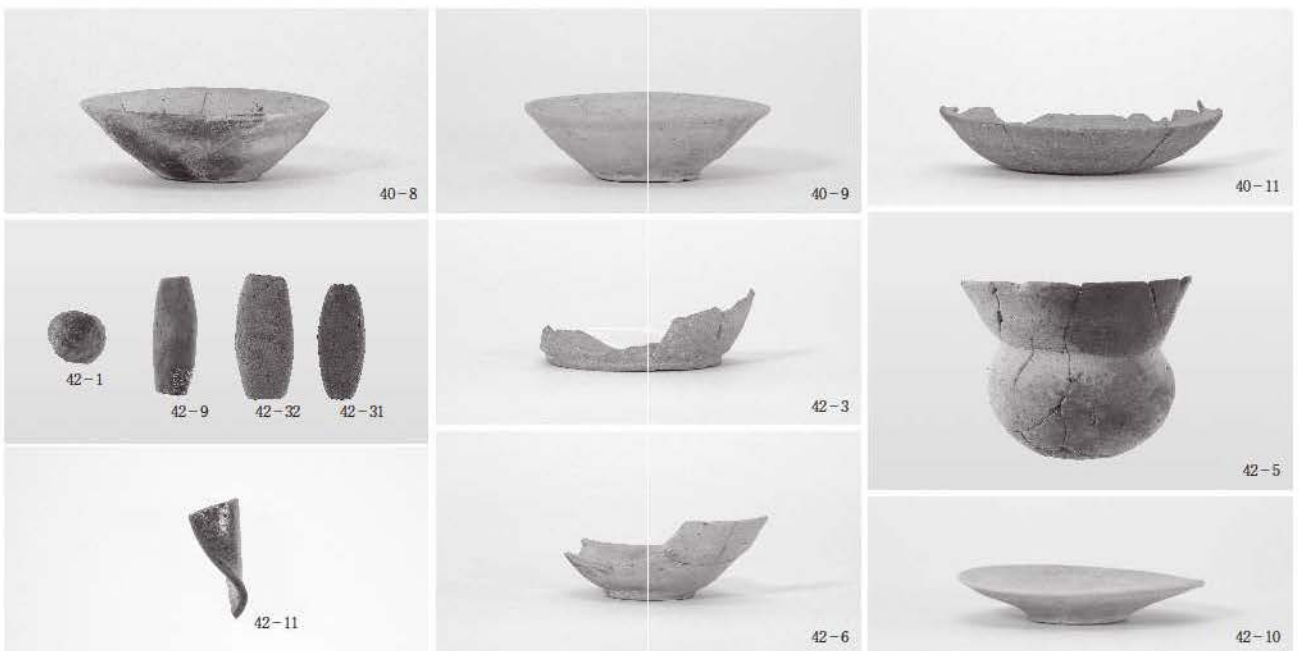
(1) 1区出土土器



(2) 2区出土土器

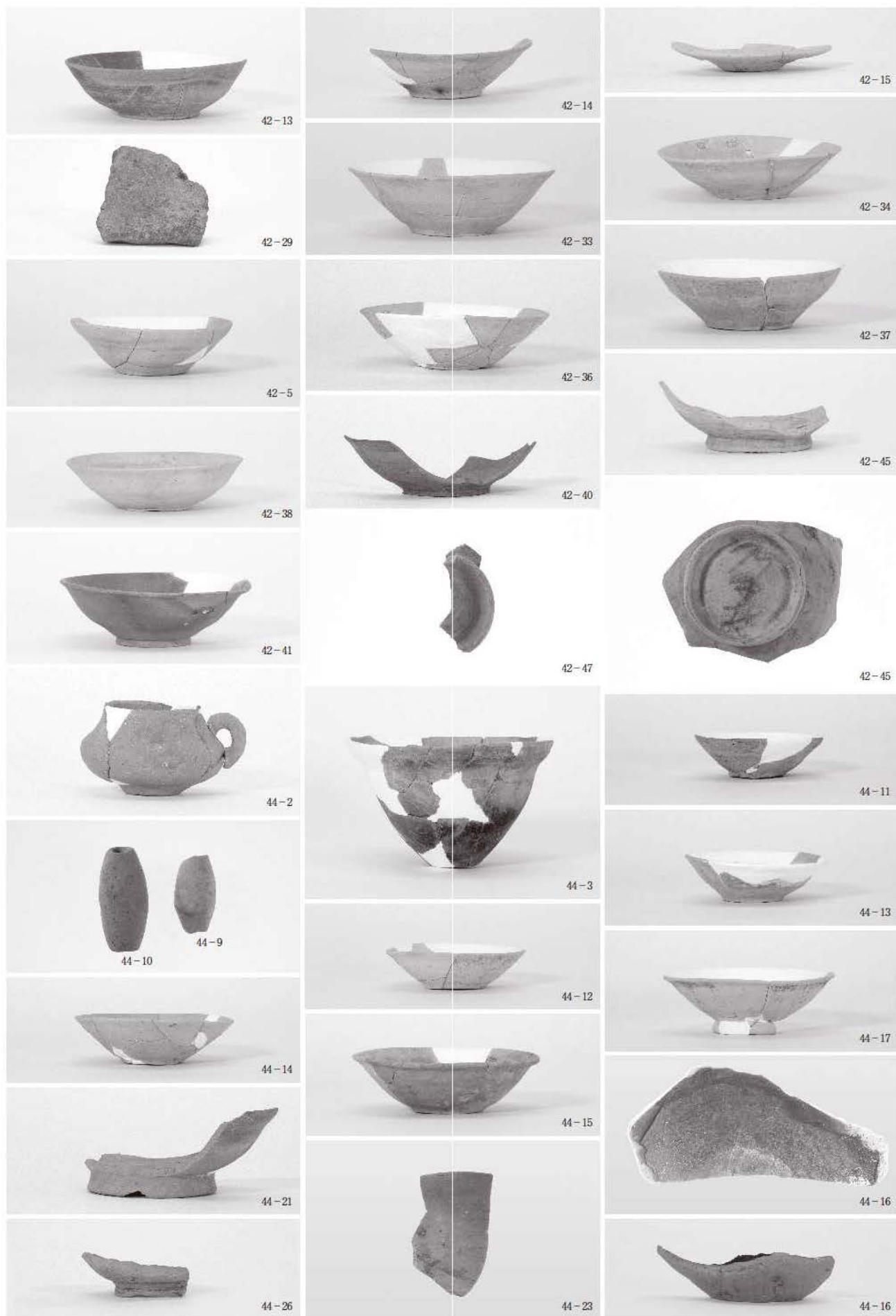


(1) 2区出土土器

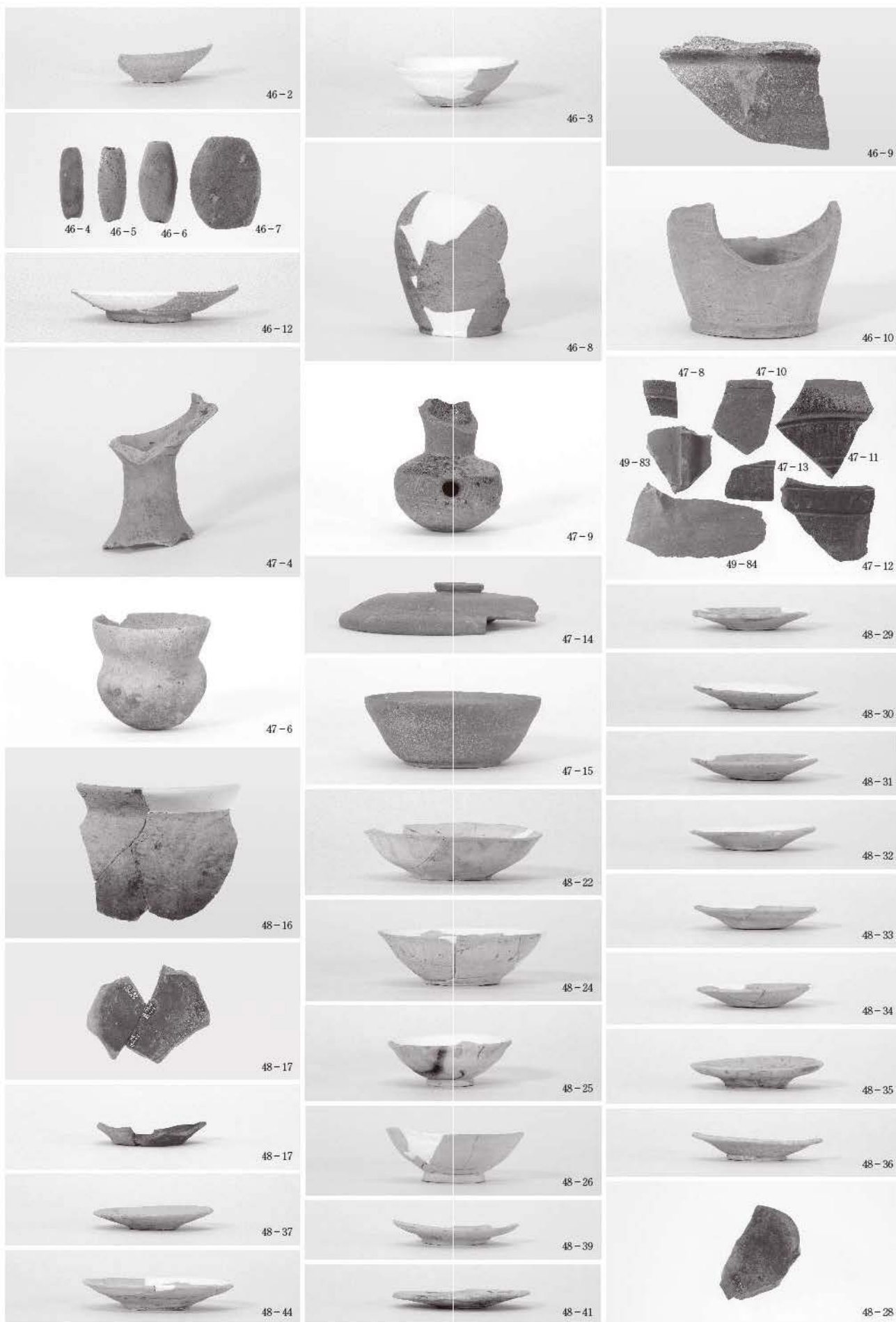


(2) 3区出土土器・陶器・土製品

図版第一八 木崎遺跡 遺物

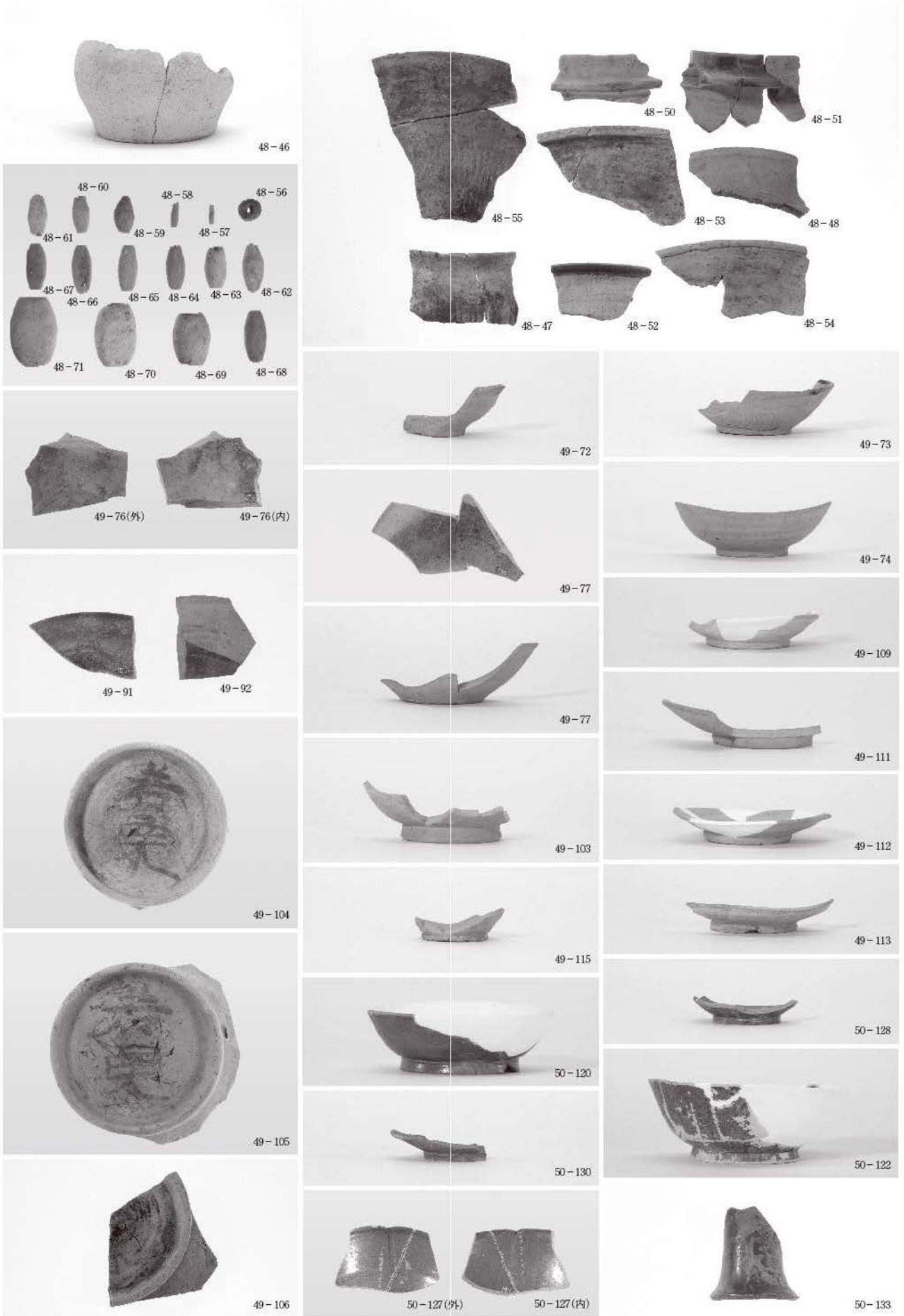


3区出土土器・陶器・土製品

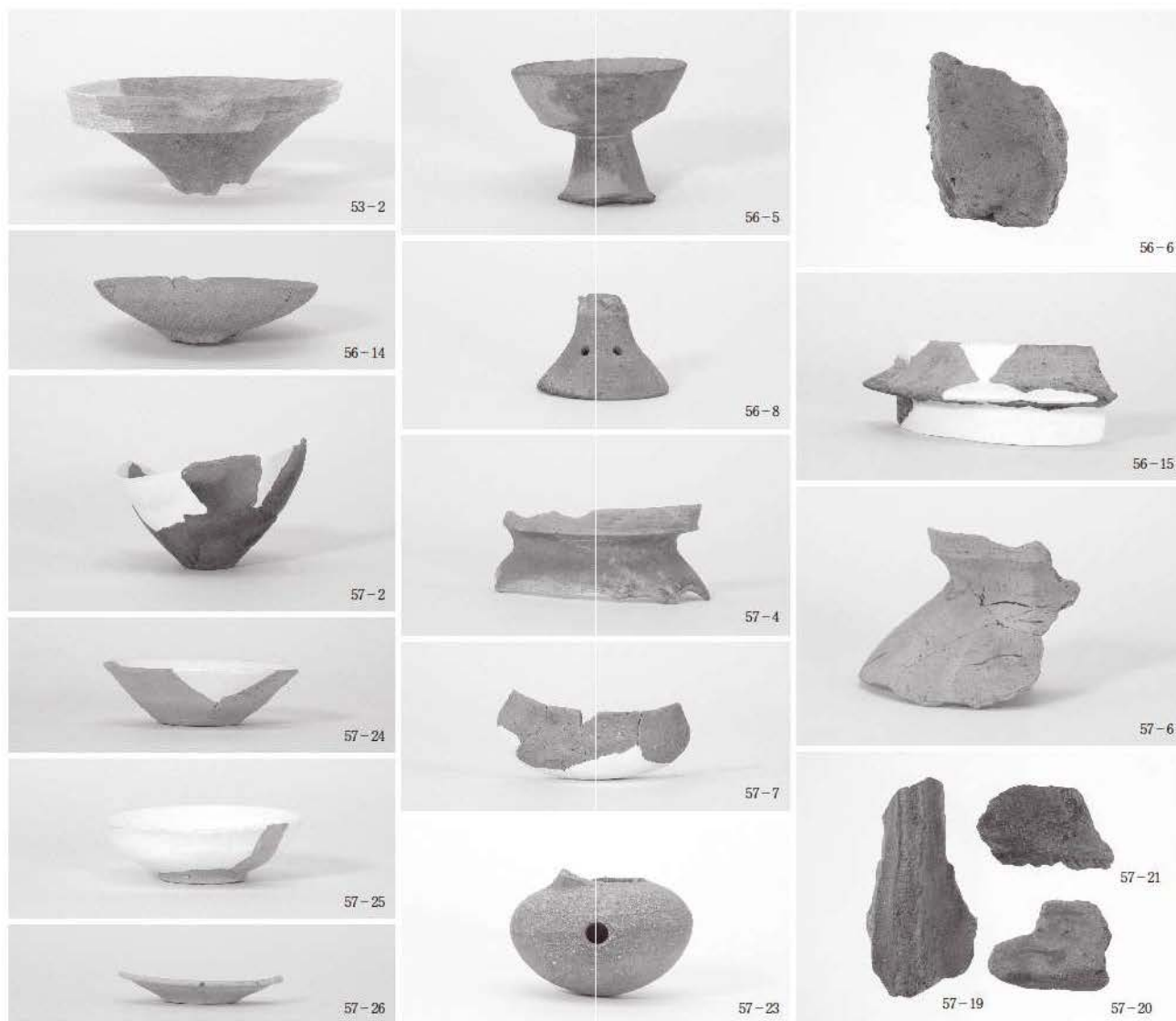


4区第1面出土土器・陶器・土製品

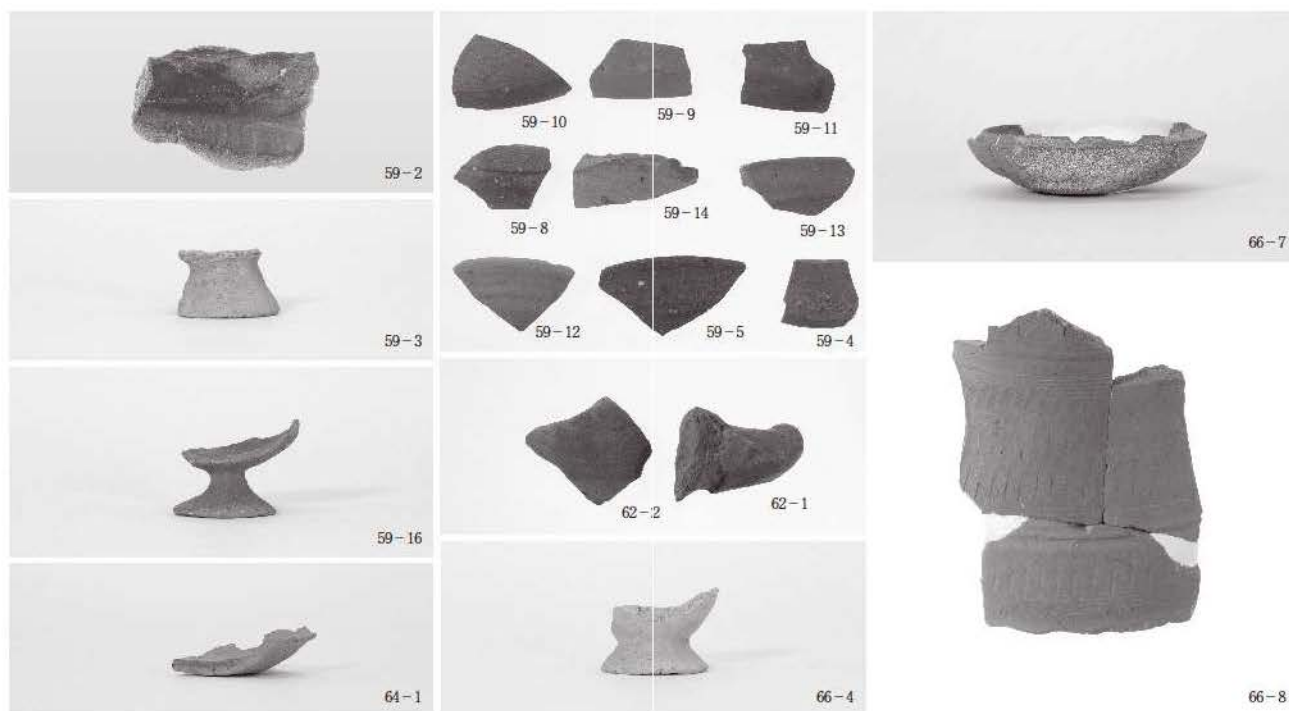
図版第二〇
木崎遺跡
遺物



4区第1面出土土器・陶器・土製品



(1) 4区第2面出土土器・土製品



(2) 5区出土土器・土製品



66-5



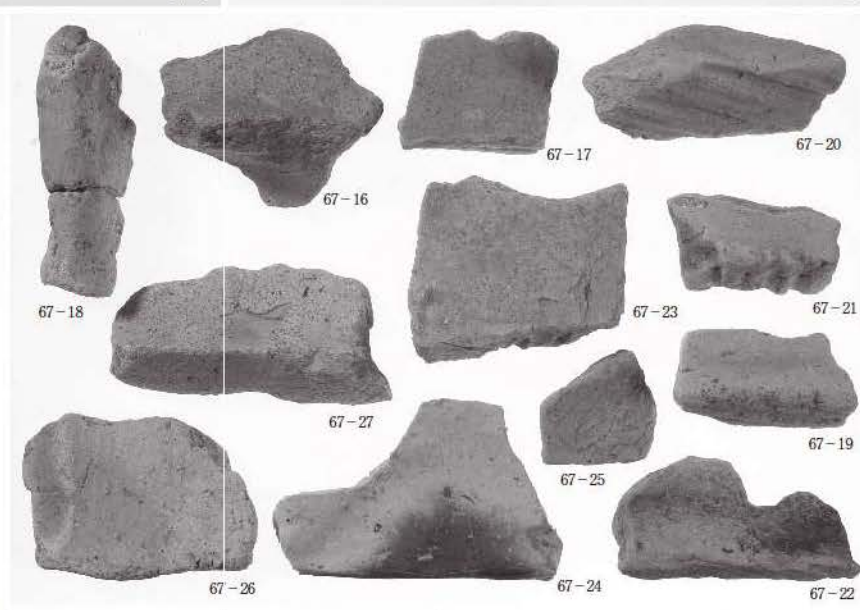
66-5



67-14



67-15



67-18

67-16

67-17

67-20

67-23

67-21

67-27

67-25

67-19

67-26

67-24

67-22



67-2



67-11



67-4



68-44



68-46



68-50



68-52



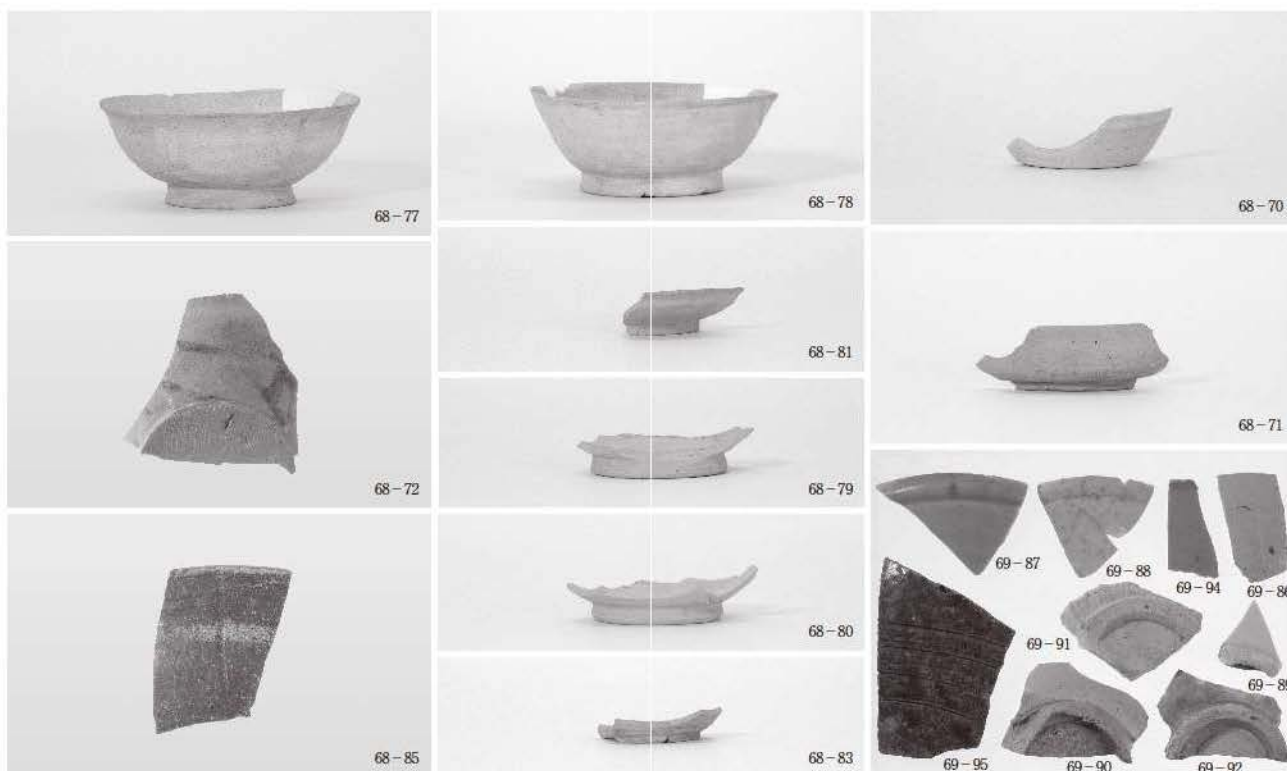
68-45



68-56



68-69



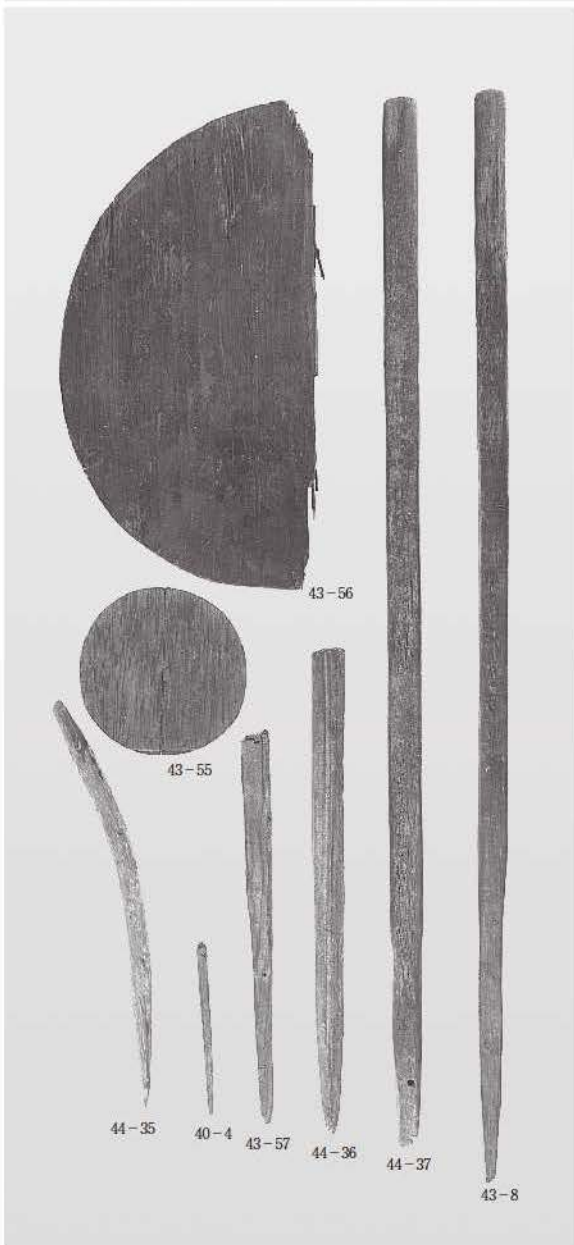
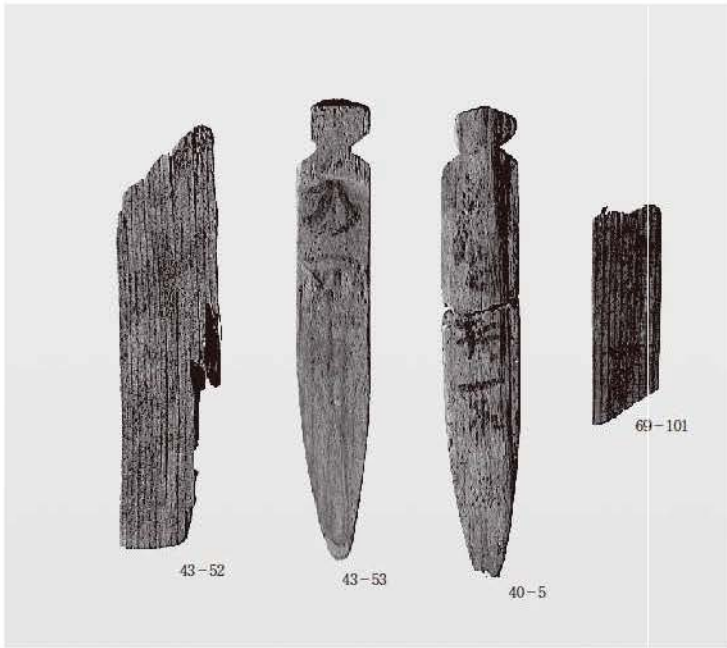
(1) 5区出土土器・陶磁器



(2) 6区出土土器・土製品

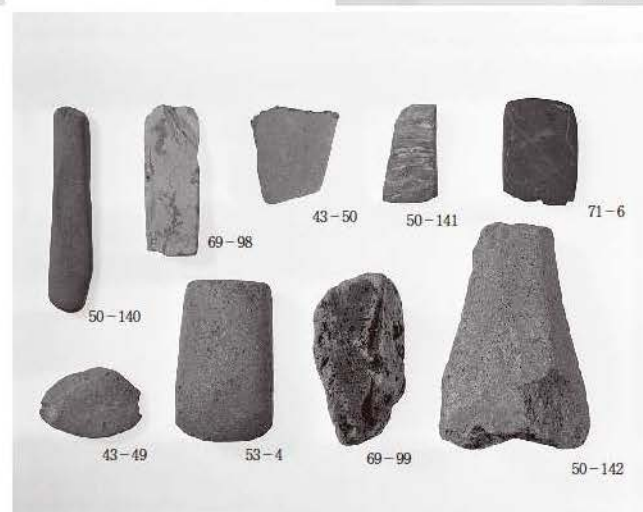
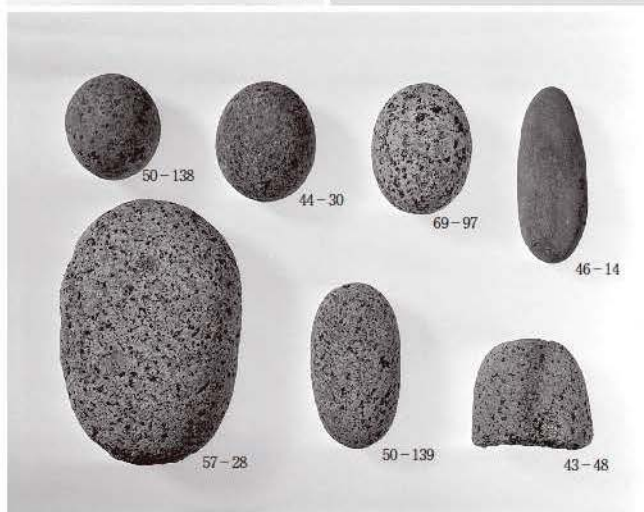


木製品 1



木製品 2

図版第二六 木崎遺跡 遺物



木製品3、石器・石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	きざきやまじょうあと・きざきいせき							
書名	木崎山城跡・木崎遺跡							
副書名	舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第113集							
編著者名	坪田聡子・富山正明・本多達哉・田中祐二・木村孝一郎・杉山大晋							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2010年03月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きざきやまじょうあと 木崎山城跡	ふくいけんおぼましきざき 福井県小浜市木崎	18204	07118	35° 29′ 8″	135° 45′ 48″	20050912 ～ 20060531	1,630m ²	舞鶴若狭自動車道建設
きざきいせき 木崎遺跡	ふくいけんおぼましわくり 福井県小浜市和久里	18204	07112	35° 29′ 8″	135° 45′ 48″	20060614 ～ 20060906	798m ²	
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
木崎山城跡	弥生墳墓 経塚 山城	弥生時代 平安時代 鎌倉時代 戦国時代	台状墓 埋経施設 堀切・曲輪	弥生土器 陶磁器 金属製品・銭貨		経塚からは非常に保存状態の良い経筒が出土している。		
木崎遺跡	集落 居館 官衙か	弥生時代 古墳時代 平安時代	掘立柱建物 井戸 土坑	弥生土器・須恵器 竈形土製品・土師器 灰釉陶器・緑釉陶器 陶磁器・木製品 石器・石製品・銭貨		「乃井村」「若栗」と判読できる墨書土器が出土している。		
要約	<p>木崎山城跡</p> <p>小浜市東部に位置する山城跡の一部を調査したところ、弥生時代後期の台状墓2基、平安時代と鎌倉時代の経塚各1基を検出し、丘陵の断続的な利用が明らかとなった。</p> <p>木崎遺跡</p> <p>弥生時代・古墳時代・平安時代の複合遺跡で、古墳時代後期の大型掘立柱建物や、平安時代の文字資料(木簡・墨書土器)など注目される遺構・遺物を検出した。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第113集

木崎山城跡・木崎遺跡

－ 舞鶴若狹自動車道建設事業に伴う調査 －

平成22年 3月15日 印刷

平成22年 3月31日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212
